

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月31日現在

機関番号：44606

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：21730518

研究課題名（和文） 母親が語る障害のあるわが子と自己の人生：生涯発達の視点から

研究課題名（英文） The way mothers narrate their own lives with their handicapped children：From the perspective of life-span developmental psychology

研究代表者

東村 知子（HIGASHIMURA TOMOKO）

奈良文化女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：30432587

研究成果の概要（和文）：

本研究では、障害のある子をもつ母親の語りをもとに、親としての生涯発達のプロセスについて考察した。具体的には、世代の異なる複数の母親に対してさまざまな場や文脈におけるインタビューを行い、その語りを分析した。それらを通して、障害児者の母親たちが生きる世界のありようと、そこに影響を及ぼす他者との関わりについて明らかにした。さらに、「実践としてのインタビュー」という方法論について理論的な考察を行った。

研究成果の概要（英文）：

The life-span development process of the mothers who have handicapped children was investigated based on their narratives. Narratives were collected through group interview, individual interview, and informal interview at peer-counseling meeting. By analyzing the narrative data, I identified the way how the mothers lived with their children and how it was linked to the people around them. The methodology of “interview as a practice” was also examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：生涯発達、親子関係、語り、障害、協同実践

1. 研究開始当初の背景

（1）社会的背景：2002年ごろから、障害児者とその家族をとりまく状況は大きく変化してきた。学校教育では、特別支援教育がスタートし、これまで障害児教育の対象とはみなされてこなかった子どもたちが、その中に組み込まれるようになった。福祉の領域に

おいては、支援費制度や障害者自立支援法の導入により、障害をもつ人々の生活が深刻な影響を受けることになった。このような変化は、障害児者本人の人生はもとより、その家族、とくに彼らを育て、長く支え続ける親たちの生き方にも大きな影響を与えると考えられる。

筆者は、障害乳幼児のための通園施設、障害児者の親によるピアサポートグループにおいてフィールド研究を行い、親がわが子の障害をいかに受けとめ、子どもの将来についてどのような思いを抱えているのかを明らかにしてきた。それまでの研究では、語られた内容をあくまで「子どもの問題」という視点からとらえてきた。しかし、聞き取りを重ねる中で、母親の子どもについての語りは、子どもを育て、子どもとともに生きる自分についての語りを含みこむものであるということが明らかになってきた。子育てを通して親自身もまた変化する。鯨岡（2002）の「関係発達」という表現が示すように、子だけでも親だけでもなく両者の関係が発達するのだといえるだろう。子どもに障害があるとわかったとき、多くの親は、それまで思い描いていた人生とはおそらくまったく異なる人生を生きることになる。子どもの障害という現実と直面した親は、子どもと生きる自らの人生をいかに意味づけ直し、どのような生き方を選んでいくのか。またそのことは、子どもの生に何をもちたらすのか。親と子の生が織り合わされながら変化していくプロセス、とくにいままで十分に検討されてこなかった親の発達過程にも目を向けることは、重要であると考えた。

（2）理論的背景：本研究の理論的背景として、以下の二点が挙げられる。第1は、生涯発達である。Baltes（1987）によれば、生涯発達とは、ある年齢の子どもに限定して用いられていた「発達」という概念を、ただすべての年齢の人々に拡張したというだけにとどまらない。それは、獲得と喪失としての発達、発達の多方向性と可塑性、発達の歴史的・文化的条件など、一群の理論的視座であって、「完成体への漸進プロセス」という従来の発達観を相対化するものである。本研究では、さらに進んで、発達を個人の内部で生じるものとしてではなく、関係という視点からとらえていくことをめざす。

第2は、「プラクティス（実践）としてのインタビュー」という視点である。インタビューは、情報を引き出すための単なる手段ではなく、研究者と協力がともに関与する協同実践である。質的心理学の領域においてこのことは長く議論されてきているものの、多くの研究は依然として、えられたデータを「その人の」内面の語りとして分析しているように思われる。本研究では、語りをそれが生まれる文脈に焦点をあて、語るという行為そのものの意味をもふまえて分析することを試みる。

2. 研究の目的

本研究は、障害のある子どもをもつ母親の語りをもとに、母親としての生涯発達のプロセス

を明らかにしようとするものであった。具体的には、①乳幼児期から壮年期まで異なる世代の子をもつ母親の語りの収集と分析、および②一人の母親への継続的なインタビューによる語りの収集と分析、③障害児者の歴史に関する資料の検討、を行い、母親にとって障害のある子どもとともに生きることがもつ意味を、社会文化的な視点から究明した。これらを通して本研究では、第1に、現代における子育て支援および障害児者支援のあり方を考える上での、新たな枠組みと視点を見出すこと、第2に、「プラクティスとしてのインタビュー」という方法論的視座に実践的な基盤を与えることを目的とした。

3. 研究の方法

以上の背景を受けて、本課題では、以下の三つの視点から研究を進めた。

（1）母親の語りの収集および分析

これまで行ってきたインタビューデータの再分析を含め、異なる世代の母親にインタビューを行い、その語りを自身の生涯発達と親子関係の変容という視点から分析した。過去の研究協力者に対し、継続して聞き取りを行った。横断的、縦断的な複数の語りを重ね合わせることにより、親子が生きている時代や社会状況による違いおよび共通点、それぞれの親子の歴史の中で変化するものと変化しないものを明らかにすることをめざした。

（2）歴史的資料の収集と分析

個々の母親の経験をより広い歴史的・文化的文脈に位置づけるため、インタビューと並行して障害児者と家族の歴史的な変化について、障害児者の親に関する心理学・社会学的研究、親の会の歴史に関する資料、親による手記などを収集し、分析を行った。

（3）語りおよび実践としてのインタビューについての理論的検討

母親たちの語りが生まれる場において何が生起しているのか、研究者が語りを聞きとりそれを分析するという実践の意味、障害児者の親にとって語るということがもつ意味について、事例に即しつつ理論的な検討を行った。

4. 研究成果

3. で述べた三つのテーマごとに、研究の概要とえられた成果を記載し、最後に全体的な成果について述べる。

（1）母親の語りの収集と分析

①青年期～成人期の子をもつ母親の語り

就労したばかりの子をもつ障害者の母親の語りから、子どもの自立をめぐる母親が生きる世界を明らかにした。二人の母親に対して行った施設職員を交えたグループインタビューと、その後に行った個別インタビューのデータを分析した。分析に際しては、語

りの内容だけでなく、語りの「形式」、および「ゆらぎ」と「ずれ」に焦点をあてた。

分析の結果、二人の母親の特徴的な語り方として以下の5点を見出し、そのような語り方をするのがもつ意味について考察した。第1は「他者の存在」である。母親の語りにはわが子をとりまく多くの他者が登場し、そうした人々に支えられることで現在の子どもの姿があるということが強調されていた。第2は「語りの中の時間」である。母親の語りには、「語る現在」が「語られる過去」を構成し、「語られる過去」が「語る現在」を構成するという、過去と現在の相互構成的な関係があった。第3は、「語りの共同構成とその結び」である。グループインタビューの場では、お互いが相手の語りを支え、補い合う一方で、そうした共同構成には結びも生じていた。第4は「笑い」である。インタビュー中に頻繁に生じた笑いは、母親たちが過去の自分を笑い飛ばすことで現在直面するより大きな問題を乗り越え、「親亡き後」というずっと消えることのない不安を一時的にでも吹き飛ばすための手段だったのではないかと考察した。第5に、二人の母親の語り方には違いがみられ、こうした違いは母親としての生き方の違いを表すものと考えた。

個別インタビューからは、グループインタビューでの語りとのずれ、および聴き手（筆者）の解釈とのずれが明らかになった。このずれについて考察することにより、「親亡き後」という未来が「語りえないこと」として母親の語りの中に存在していたこと、ふたりの母親がいま娘との関係の転換点に立っていることを見出した。

以上をふまえ、1) 子どもの自立をめぐる母親たちの語りにおいて、「現在の視点」の語りと「未来の視点」の語りがせめぎあっていること、2) 「子どもの自立への願い」が矛盾をはらむものであり、それを解く鍵が「他者性をもった他者」という新たな親子関係の構築にあること、3) 母親が子どもの自立を目標とし、それについて語ることもつ意味、の3点について論じた。

②ピアサポートグループにおける二つの世代の母親たちの語り

ある地域の障害児の親の会が毎月（ただし7、8月は休会）開いている交流会 T 会に2年間継続して参加し、参与観察とインフォーマルインタビューを行った。

会で語られていた内容は、具体的には、それぞれの母親が学校や行政、施設、医療機関などとの間で感じている問題とその解決方法であった。しかしそれらを通して、母親たちは、親としていかに生きるべきか、子どもに関わる機関や制度といかに交渉すべきか、他の親とどうかかわるべきかという「知」を

生み出し、蓄えているように思われた。

本研究ではこのような語りを通じた実践の意義を、「親としての生き方」と、それと不可分の関係にある「他者とのかかわり」という視点から整理し、考察を行った。

1) 親としての生き方：ある母親は、自分たちを「時代の流れからはみ出した」存在と位置づける。T 会の母親たちは、現在の社会や制度に対してどこかおかしいという思いや憤りを持ち、その中でわが子をどう育てていくのかという「小さな範囲でこだわって」、就学先（地域の学校か特別支援学校か）などさまざまなことを選びとってきた。同じ T 会の仲間であっても選択のしかたは異なっており、そうした子どもに関する選択は、それぞれの親としての生き方の選択でもあるように思われた。そして T 会は、各自が選択した生き方を支え、後押しする場となっていた。

2) 他者とのかかわり：親が自らの「こだわり」すなわち自分の思う生き方を実現するためには、教師や施設職員など子どもにかかわる他者と交渉していかねばならない。先述の「はみ出している」という言葉は、そうした他者から見た自分たちを表現したのもでもあり、「障害児者の親」という枠にはめ込もうとする他者への抵抗を示すものでもあると思われる。母親たちは、そうした「手の届く」範囲の人々に粘り強く働きかけその意識を変えようとしてきた。また、自分たちの希望をかなえるためにはただ希望を押し通そうとするのではなく、時には相手に譲歩し、自らの思いを正確に伝えるために努力する必要があるということが常に確認されていた。T 会では周囲の他の親のことも頻繁に話題に上り、健常児の親による差別的な目に対する怒りや、社会や制度に対して疑問を持つと同じ立場の親へのもどかしさが語られていた。若い子どもをもつ若い世代の母親について、自分たちと対比させて語られることもあった。このような他の親の姿は、自分たちを映し出す「鏡」としての意味をもっていたのではないかとと思われる。

最後に、T 会が直面している問題について考察した。T 会は大きく分けて、成人した子をもつ親と、中学校や高校に通う子をもつ親の二つの世代からなっており、上の世代の母親たちが考え、実践してきたことを下の世代が受け継ぐ場としての意味を有していた。T 会のメンバーは、次の世代の母親に伝えていくために活動を続けているが、実際は近年ほとんど新しい人が入ってきておらず、継続の困難を感じている。このように親同士が語りを通して支え合うことを目的とするピアサポートグループが立ち行かなくなるという状況は、社会や制度の変化と深く結びついていると思われる。

③幼い子どもをもつ母親の語り

②で「若い世代」とされていた親たちの語りを検討するため、必ずしも障害があるわけではないが、子育ての初期に大きな困難に直面するという意味では共通の経験をもつと思われる、超低出生体重児の母親に着目し、その語りを分析した。

ある地域の超低出生体重児親の会P会に参加する母親5名に対してインタビューを行い、それをもとに、低体重の子どもを出産するという経験に対する母親の意味づけと、その変化のプロセスについて論じた。

5名の母親それぞれの語りを、妊娠から出産までの経緯と、特徴的に語られたトピックを中心にまとめた。出産までの経緯も、母親たちの経験や思いも、共通点はあるものの一人ひとり大きく異なっており、そこには、自身とわが子をとりまくさまざまな他者との関係が大きく影響していることが明らかになった。

本研究では、母親たちが自分の子どものことを表すために用いていた「小さく生まれた」ということばを手がかりとして考察を行った。その結果、第1に、小さく生まれたという体験が、その後も長い間母親のなかに澱のように残り、子育てのさまざまな場面で立ち戻る原点になっていることが明らかになった。たとえば一人の母親は、何か心配なことがあるたびに「小さく生まれたからかな」と考えてしまうと述べている。しかし、第2に、その意味づけは、わが子を含む他者とかかわりの中で変化したり明確になったりすることが明らかになった。ある母親は、わが子に他の子と変わらず普通に接する幼稚園の先生に出会い、自らが抱えている矛盾に直面することになったという。別の母親は、小さく生まれ、障害を負うことになった子どもを育てることによって、これまでの子育てに対する考え方を揺さぶられたと語っている。このような意味づけの変化は、子どもとともに生きる時間、さまざまな他者とかかわりながら子どもを育てていく経験の積み重ねを通して起こるものだと考えられた。

(2) 歴史的資料の分析

①障害児者の母親に関する研究のレビュー

従来の心理学研究を収集し、分析した結果、母親が経験する心理過程に関するもの、親のニーズと支援に関するもの、の二つに大別された。前者において古くから中心的なテーマとなってきたのは障害受容過程であり、有名なものとして「段階説」と「慢性的悲哀説」がある。これらの研究では、主に支援に携わる専門家の視点から、多くの親が経験する心理過程を明らかにしてきた。しかし、それぞれの親の違いや、専門家と親の間の見方や感情のずれが見落とされることにもなりうる。

後者のニーズと支援に関する研究も、障害児者の母親を、ストレスや不安などの心理的な問題を抱え、支援を必要とする「弱い」存在として一面的に描き出してしまう危険性をはらんでいるといえる。

以上から、本研究の方向性として、第1に、研究者という立場によって見えなくなるものがあることはふまえた上でできるかぎり母親の視点に立ち、一人ひとりの母親が何を思い、どのように生きているのかを明らかにしていくこと、第2に、母親を自らと子どもの生き方を主体的に選び取っていく能動的な存在として捉えること、の重要性が確認された。

②障害児の親による手記の分析

(1) ①②のインタビュー研究と比較し、語りが生まれる文脈の影響を検討するため、障害のある子をもつ親が書いた手記を、親自身の心の揺れに焦点をあてて分析した。

ここでは、児玉真美著「私は私らしい、障害児の親でいい」(ぶどう社、1998年)を中心に、どのようなテーマが語られているかという観点から分析した結果を報告する。

第1のテーマは、「底なしの明るさと暗さ」である。この手記では、娘の性格や彼女との日々の生活がとても生き生きと、ときおりユーモラスに描写されている。しかしその一方で、そうした明るさは対極的な、底の見えない暗さを感じさせる記述もある。

第2のテーマは、「専門家に対する批判的なまなざし」である。「専門家」(特に医療者)と「当事者」である自分のあいだにある深い溝、専門家がさまざまなルーティンを通して作り出している絶対的な上下関係に対する批判がなされている。

第3のテーマは、「自分自身の人生を生きること」である。障害児の母親は「世間の人それぞれの頭の中にある『障害児の母親はこうあるべき』という形に沿って暮らしていないと、愛情がない母親だと決めつけられる」。それに対して「たまたま障害がある子が生まれたというだけで、どうして私になにもかもあきらめなければならないの、という怒りのようなものがある」と児玉は述べている。障害児の親として世間から求められる生き方と、親が自らの人生を生きることとの間には時にずれが生じ、そのことが親にとって負担となっていることが明らかになった。

通常の研究では、研究者の側が何らかの目的をもち、それを引き出すためにインタビューを行うのに対し、手記では、親自身が人々に伝えたいメッセージが語られている。また手記には、まだうまく整理がついていないような複雑な思いもあらわれており、手記を対象とすることで、インタビューとは異なる側面から障害児者の親が生きる世界を明らか

にすることが可能になった。

(3) 実践的インタビューおよび語り研究についての理論的検討

(1) で報告した事例研究を通して、インタビューや語り研究の新たな可能性と限界が明らかになってきた。そこで、複数の場において語りを聞きとること、それを研究者という外部の「他者」が行うことの意味について、「ずれ」という観点から考察を行った。

本研究課題では、グループインタビューと個別インタビュー、縦断的インタビュー、参与観察とインフォーマルインタビューなど多様な場や文脈において語りを聞き取ってきた。こうしてえられた複数の語りを重ね合わせることによって、さまざまな「ずれ」が浮かび上がってきた。

そもそも体験を語ることは、原理的に「ずれ」を生み出す(森, 2010)。さらに、何かについて聞き取ろうとする研究者の行為は、意図せずして理解可能な何かを作りあげると同時に、そこに回収されない何か、すなわち「ずれ」を生み出すことになる。

本研究を通して、このような「ずれ」は必ずしも否定的に捉えるべきものではなく、むしろそうした「ずれ」こそが、新たな理解の可能性を切り開く手がかりとなりうることを示唆された。とすれば、「ずれ」が生じることを前提としたうえで、その「ずれ」から何を見出すことができるのか、それがインタビュー研究という営みの核心となるのではないかと考えられる。

ただし、どのような「ずれ」でも許容されるわけではもちろんない。協力者を可能なかぎり理解しようとすることの副産物として生じる「ずれ」だからこそ意味をもつのであろう。少なくとも、協力者とのさらなる対話を不可能にするような「ずれ」であってはならないということは言える。

インタビュー研究が研究者と協力者との間に生じる「ずれ」を前提とし、そこから生まれるものに焦点をあてるならば、それは必然的に協同実践となる。そこで研究者に求められるのは、そうした「ずれ」を協力者がどう受けとめるのか、その「ずれ」は新たに何を生み出したのか、あるいは生み出しえなかったのかを常に検証していく姿勢であろう。

(4) 全体的な成果

本研究を通して、母親たちの生き方と、そこに影響を与える他者との関わりという、母親の生涯発達のプロセスを考えるうえで核となるテーマが浮かび上がってきた。この二点から全体的な成果をまとめ、最後に親にとって語りごとと他者が聞きとることの意味、および発達という概念について検討する。

① 障害児者の母親が生きる世界

母親たちの語りには、「明るさと暗さ」として述べたように、子どもとの生活を楽しく前向きに捉えるような語りとは、底の見えない不安や絶望を感じさせる語りとは共存していた。このことは、母親たちが、願いや希望と厳しい現実の間で、大きな心のゆれを経験してきたことを示していると思われる。

『現在の視点』と『未来の視点』のせめぎ合いとして述べたことは、ここに重なり合う。現在までわが子とともに多くの問題を乗り越えてきたことは、母親にとって大きな自信となり、そうした現在がこれからも続いてほしいという希望が語られる。これが現在の視点である。しかしその一方で、親自身や子どもの死という、いつか訪れるであろう未来を先取りし、そこから現在を眺めたとき、現在は常に不十分な状態として捉えられてしまう。それゆえ、母親たちは不安を感じ、さらなる努力へと駆り立てられることになるのではないだろうか。

障害のある子と生きるということは、親にとって自らの生き方を問われる経験でもある。子どものことで重要な選択を行うたびに、母親は、自分が何を最も大事にしたいのか、そのために何を諦めなければならないのかを考え、選び取っていかねばならない。

しかしながら、「自分自身の人生を生きること」が難しいと考える母親もいる。障害児者の親として世間から求められる生き方と、親が自らの人生を生きることとの間に「ずれ」を感じているためである。ある母親は、「障害児を産んだら道が決まってしまうというのではなく、子育てに夢をもちたい」と語っていた。母親たちを縛る「世間」を作り出しているのは、私たち自身である。この「世間」のありようと成り立ちを明らかにすることは、今後の課題となるであろう。

② 関わる他者との関係

確かに、障害のある子をもつという経験は、多くの親にとってその後の人生に決定的な影響を及ぼすことになる。しかし、本研究から、わが子の障害に対する意味づけは、子どもとともに生き、さまざまな他者と関わりながら子どもを育てる経験の積み重ねを通して変化していくことが明らかになった。

子どもの障害のゆえに、母親たちは仮にそうでなければ出会わなかったであろう他者と出会い、時には交渉し、戦うことを余儀なくされる。そうした交渉は、親にとって消耗的なものとなることも多いが、そうした出会いの中で自分自身が変わる経験をすることもある。また親が自らの思う生き方を実現するためにも、他者の力は不可欠である。

障害児者の親に対する支援を考えるうえで重要なのは、制度を整えること以上に、私たちが彼女らにとってどのような他者とし

て存在しているのかということなのではないか。誰も、その子どもの親であることを肩代わりすることはできない。その親が背負っているものがどのようなものであっても、その荷を勝手に下ろさせることはできない。では、他者である私たちにできることは何か。その一つが、親たちに向かい合い、語りに耳を傾けることなのではないかと思われる。

③障害児者の親にとって語ることの意味

児玉 (1998) は手記のあとがきで次のように述べている。『書く』ということは、自分でも気づかないフリをしていたことや、見て見ぬフリを決め込んでいるから、当たり前顔をしてフツーに暮らせていることどもに、自分自身で手を突っ込んでほじくり返すことなのかもしれない。・・中略・・(しかし、そうした) しんどさの中に、『癒し』だとか『許し』だとかいうものに向かって、無意識にのぼされた手が見えてきたように思えるのです。

本研究で行ってきたことは、母親たちが直視しないことによって生きている、まさにその部分を引きずり出そうとするようなものだったかもしれない。しかし、そのことがもし何らかの意味をもちうるとすれば、それはおそらく癒しや許しとしてではなく、研究者と母親との間に生じる「ずれ」としてではないか。どれだけありのままを捉えようとしても、研究者が描き出す母親たちの姿は、必ず実際の姿とのあいだにずれを生じさせることになる。そのずれが母親を傷つける危険性は確かにある。しかしそのずれを介することによって、どちらの側も自らのありようと、他者の視点に気づくことが可能になる。それが重要なことなのではないだろうか。

④発達と希望

本研究の中で描いてきたような母親たちの人生の過程を「生涯発達」として捉えることは、はたして適切なのだろうか。研究当初の理論的背景として述べたように、「完成態への漸進プロセス」という従来の発達観は相対化されてきた。しかし、発達は獲得と喪失の両面を含み、多方向的かつ可塑的なものであると認めるならば、発達とは結局人生そのものということになりはしないだろうか。

発達という概念は不要だと主張したいのではない。発達という概念に希望を見出しているのは、むしろ障害児者の母親たちだからである。ただし、発達に関するこれまでの議論には、「誰が誰の発達を語るのか」という視点が抜け落ちていたのではないか。「発達」とは、ある人を外から眺め、客観的なものさしをあててその人の何らかの側面を測る言葉であった。しかし、母親がわが子の発達を語るとき、そうしたことを超えた何かが含ま

れているように感じられる。「子育てに夢をもちたい」と語った先の母親は、進行性の難病の子どもをもち、以前できていたことが次第にできなくなっていく姿を見守り続けてきた。そのような過酷な状況の中でもなおもち続けようとする発達への希望とは何か。そうした希望が親自身の生にも見出せるとすれば、それはどのようなものか。親が希望を持ち続けるために私たちは何ができるのか。この問いについて考えることを今後の課題としたい。

[文献]

Baltes, P. 1987 Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline, *Developmental Psychology*, 23(5), 611-626.

児玉真美 1998 私は私らしい、障害児の親でいい ぶどう社。

鯨岡峻 2002 「育てられる者」から「育てる者」へ——関係発達の視点から 日本放送出版協会。

森直久 2010 語りによる体験の共約可能性 質的心理学フォーラム, 2, 27-36.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①東村知子, 質的研究という営み、論文という物語り、質的心理学フォーラム, 査読有, 3, 2012, 85-87 (掲載決定)。

②東村知子, 母親が語る障害のある人々の就労と自立——語りの形式とずれの分析, 質的心理学研究, 査読有, 11, 2012, 136-155.

③東村知子・西迫麻衣・濱田彩芽, わが子が「小さく生まれる」ことの意味—超低出生体重児の母親の語りから, 発達・療育研究, 査読無, 2011, 19-35.

[学会発表] (計2件)

①東村知子・西迫麻衣・濱田彩芽, わが子が「小さく生まれる」ことの意味—超低出生体重児の母親の語りから, 日本発達心理学会第23回大会, 2012年3月10日, 名古屋国際会議場。

②東村知子, 親が語る障がいがあるわが子と自己の人生—親による手記の分析, 日本発達心理学会第22回大会, 2011年3月26日, 東京学芸大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東村 知子 (HIGASHIMURA TOMOKO)

奈良文化女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号: 30432587